

●特集●

保育文化の継承と創造

人間の発達や行為がそれらを取り巻く文化や慣習と不可分に結び付いているように、保育の営みもまた、それを取り巻く文化や慣習、社会的・歴史的な脈と無関係ではない。これまで日本の保育が培ってきた知や見識は、保育文化として日々の実践の中に宿っている。今回は、保育文化の継承と創造という視座から、保育の今を見つめ直してみたい。

保育文化の本質を求める時代の潮流

磯部 錦司

制度改革のさなか二つの見方がある。「制度改革によって保育の内容が置き去りにされていないか」、「制度改革のときだからこそ新たな保育を生み出すときではないか」と。いずれにせよ、保育の質に目が向けられなければならないときが来ているのは間違いない。

日本の保育・教育の歴史を紐解いてみても、例えば、山本鼎の自由画運動や以後の倉橋惣三の生活主義、終戦後の創美運動やプロレタリア生活主義など、それらは自由や民主主義といったよりよい社会を求めようとする考えを保育・教育実践をとおして実現しようとするものであった。そして、それらの教育思想は共通してこどもの生活と表現を結びつけ、戦争や近代化の中で衰退と創造を繰り返すスパイラルに展開してきた。保育において生活や表現が着目されるということは、こどもの「生」や「かけがえのなさ」、その子の「生きる営み」そのものが保育の中で重視されることであり、今日においてこそ、その動向への期待は膨らむ。

戦後、東京大学の太田堯氏などが岐阜県中津川市周辺をフィールドに展開していた、生活と表現に目を向けた「恵那の教育」の場において、私は幼少・学童期を過ごした。1970年代、その教育は効率と結果を重んじる「教育の現代化」において消滅していったが、学びの本質を重視する姿勢と、それを受容しない経済優先の現代社会が対峙する状況の中で矢面に立たされていたのは、実は研究者や実践者ではなくこどもたちであったという思いは拭い去れない。2000年代初頭、背景や教育思想・手法は異なるが「恵那の教育」と同様に、戦後の民主主義を求める思潮から立ち上がった、表現を中核とした生活基盤型のレッジョ・エミリアの実践が日本に紹介されたとき私は衝撃を受けた。戦後

のレジスタンスの思想と地域の共同体によって生まれた教育実践が今日において継続し、貫かれ輝いているのである。その実践は、文化も時代背景も違うため安易に模倣すべきものではないが、日本の文化や風土、ここに生きるこどもの生活に立脚するという本質をつらぬく保育を創造する必要性を強く感じた。

日本保育学会第68回大会を振り返ってみたい。まず、実行委員会企画シンポジウムⅠ「倉橋惣三の幼児教育思想の理解・継承と創造的実践」での、「生活から文化へ」の論や戦前から戦後の自発保育へ至る経緯は、倉橋思想の理解を新たにするものであった。そして、そこでの事例報告や、課題研究委員会企画シンポジウムでの「質の高い保育は実現できるのか」の問いは、まさに本主題への投げかけでもあった。また、実行委員会企画特別フォーラム「日常のこどもの中に見る“新たな保育の創造”」では、オーストラリアとスウェーデンと日本にみる生活基盤型保育のあり方から、生活そのものがアートであることを確かめた。さらに実行委員会企画シンポジウムⅡ「生命観を軸とした保育のパラダイム」においては、現代哲学の見地から、森岡正博氏によって「アートは保育を拓く手段と成り得る」という指摘がなされた。そして、国際シンポジウムでは、舞台芸術をとおした保育の可能性が示された。これらの方向は、世界の保育が生活と表現を基点にして深められようとしていることを確かめるものであった。

日本保育学会第68回大会翌月の2015年6月、鳥取市で民間保育団体の全国研究大会が催された。そこでのテーマの文言に、これまでの日本の大会では見たことのない言葉が掲げられ、それは、「こどもの生活を豊かにする学びのプロセス」として意味づけられていた。時代は、保育の創造に向けて動いていることを実感した。

●Profile

磯部 錦司 (いそべ きんじ)

椋山女学園大学 教授

オーストラリア・デンマーク・チェコなどを拠点に生命を主題としたプロジェクトを展開。

主な著書に『子どもが絵を描くとき』(一藝社)、『自然・こども・アート』(フレーベル館)、『保育の中のアートプロジェクト・アプローチの実践から』(小学館) などがある。

アートと保育の融合

佐木 みどり

揖斐幼稚園をアーティストと共に創立して37年間、子どもにとってどのような幼稚園生活が楽しい意味ある生活なのかと探求し続けてきた。保育理念は「はっけんとぼうけん」である。子どもが自ら何だろう、どうしてだろう、不思議だな、試してみたい、調べてみよう、表してみようと思える園生活を実現できるように試行錯誤し探求してきた¹⁾。カリキュラムの柱に位置付けたのは、「自然」と「アート」である。

「自然」は、園庭づくりを中心に考えている。虫が生息し鳥がくるような豊かな自然を実現するために、園庭には100種類、約165本の木と様々な草花を育てている。園庭の土、砂利なども子どもが触ってみたい、試したい、面白そうと思えるものを探してきた。

「アート」は、いわゆるアート活動という意味合いを超えた、子どもが生きることそのものだと考えている。子どもが自ら始めた遊びそのものがアートなのだ。

砂場で遊ぶ、絵を描く、つくった物で遊ぶ、草や木の葉で遊ぶなど、つくっては壊し、壊してはつくっていくことそのものが遊びでありアートである。虫とりを例に挙げよう。初夏一番に出てくるイトトンボ、梅雨の頃に出てくるカワトンボ、ハグロトンボ、夏になるとギンヤンマ、アキアカネなど、飛んでいる高さも生息する場所も違う。子ども達はそれらを捕るために最初は走り回っているだけだが、次第に視野が広がり、虫とり網の扱いを工夫し、網の振り方を考え始める。この体験が作品などに表れる。

その他の環境としては絵本や図鑑などの蔵書を増やし、保育室には素材や材料、幼児が使いこなせる道具を準備し、子どもが試したい、調べたいと思ったときにすぐに取りかかることができるように心がけている。遊具や玩具は子どもがかかわることで変容するような応答性のある物が中心である。まだまだ不十分ではあるが、園舎全体の子どもの動線などを考慮し、建物の改修も重ねてきている。

遊びやアートには正解や間違いがない。だから、思いつきり試してみることができる。子どもは試して工夫していく楽しさ、挑戦していく醍醐味を遊びの中で知っていく。子どもが自ら始めた遊びの中で試してみたい、やってみたいという思いを認め、彼らが自ら挑戦すること、「表し」ながら考え、考えながら「表して」いく過程を重視している。

環境を活かし保育理念を保育に実現するのは保育者である。そのために研修を重視してきた。特段、アートのための研修をするわけではない。研修会は、保育者から立ち上げた問題を仲間の保育者と共に考え²⁾、相互に意味付けする場³⁾となっている。保育を深め、子どもを理解しようとする姿勢を常に持ち、子どもの行動を肯定的に受け止め、育ち行く彼らを支え、助け、

導いていこうとする保育者のあり方を追求していくことそのものが揖斐幼稚園の保育観、アート観をつくり上げていることに気付いたのだ。

今実感しているのは、保育はアートである、ということだ⁴⁾。

37年間かけて子どもにとって楽しい幼稚園を考えてつくってきた環境や保育の内容が、保育者や子ども達に受け継がれ、根付き、揖斐幼稚園の文化として息づいていることを実感している。

[引用文献]

- 1) 佐木みどり(2015) はっけんとぼうけんーアートと協働する保育の探求一. 創成社.
- 2) 佐木みどり(2004) 保育における「子どもを見ること」の考察. 相川書房.
- 3) 大場幸夫(2007) 子どもの傍らに在ることの意味. 萌文書林.
- 4) 前掲 1)

●Profile

佐木 みどり (さき みどり)

学校法人佐木学園揖斐幼稚園 園長、岐阜聖徳学園大学 准教授
現場に軸足を置きながらの実践研究をスタンスとし、育てる者(保育者・養育者)のあり方、保育とアート、「おとなが行動に問題があるとする子ども」のかかわり、について研究している。

子どもと保育の文化に学び、 新たな保育の創造を

安氏 洋子

「遠い記憶が遺伝子に刷りこまれているように、既に、あらゆる歌はうたわれ、私たちが待ち期む美も、世界に遍在している。それらは、実は、私たちの身近な生活環境の中にさえ見出せるはずのものだろう。詩の起源が、永劫の時間を不過視の痕跡に封じた古代の巨石や、砂壁に遡れるように、世界の至るところに詩は書かれ、歌はうたわれていた。目を凝らし、耳を澄ませば、その総てのうたやことばを読みとることが出来るはずだが、怠惰が私たちを盲目にしている」¹⁾と武満は言う。

2015年5月に開催された日本保育学会第68回大会において、実行委員会企画特別フォーラム「日常のこどもの中に見る“新たな保育の創造”」(企画：磯部錦司・椋山女学園大学)が開催された。その中で磯部氏は「今、求められることは、現代という時代において、足元に立脚した『想像と創造に満ちた日本独自の展開』を切り開いていくことだ」と述べている²⁾。大会テーマにもみられる「保育文化の創造」は、今日の課題の提示であると同時に、今後の日本の保育の発展に向かう重要な契機といえる。

2015年度より子ども・子育て支援新制度がスタートした。保育や子育て支援の量の拡充や質の向上を目指

し開始されたが、一方で保育現場からは混乱の声も多く聞かれる。こうした過渡期にある今こそ、保育文化を創造する必要があるのではないだろうか。

子どもが健やかに育つことを願い、実践してきた保育や子育てにおける先達の知恵や技術は、保育文化として保育の内に生きている。しかし、こうして育まれてきた文化は、今日の大きな環境変化の中で継承することすら困難になっている。また、子どもの生活する姿や保育者のありよう、地に足のついた保育実践や研究の創造と共有は、いまなお十分とは言えない。これまでのすぐれた保育実践や研究から生まれてきた保育文化を継承・発展させ、よりよい保育実践を創造し、展開できる保育者の育成と、それを支える研究者の育成のための研究と交流を目的として、筆者らは2014年に日本保育文化学会（代表：太田光洋・和洋女子大学）を設立し、養成校教員と保育者が協働して保育文化（遊びや保育内容、その方法について等）や実践の継承と共有に取り組んでいる。図らずも日本保育学会のテーマと符合しており、その問題意識は保育学に求められる時代の要請とみることができよう。

澤田は「指導者より継承してきた規範の範囲では、表現したいものが十分に表現しきれないという不足を学習者（伝承者）が感じた場合、規範を逸脱した表現を求めようになる。これが新たな創造となり、それが当該の分野で検証され、容認された場合、新たな規範となっていく¹⁾」としている。そして日本においては、新たな創造とともに従来の音楽も淘汰されることなくそのまま継承されていくという点で、重層的発展を示していると述べる。すなわち継承されてきた文化が引き継がれつつ、そのうえに新たな創造的世界が生み出される。

表現や音楽と同様、保育においても、先人たちが残してきたもの、既にあるものをまずはよくみて知ることが必要であろう。そして眼前の子どもの姿や地域にふさわしい新たな保育文化を積み重ねていくことが求められている。「怠惰」に陥らないよう、見落とさず継承し、育んでいかなければならないものは何かを、見極めていけるよう努力していきたい。

[引用文献]

- 1) 武満徹(1996) 時間の園丁. 新潮社. 52
- 2) 日本保育学会(2015) 日本保育学会第68回大会プログラム. 36
- 3) 小島律子・澤田篤子編(2013) 音楽による表現の教育. 晃洋書房. 336

●Profile

安氏 洋子（やすうじ ようこ）
福岡女学院大学人間関係学部子ども発達学科 講師、
日本保育文化学会事務局
音楽関連の授業を担当し、音環境や音楽における創造性、音楽そのものが持つ力について日々考えている。音楽を介して感じ、考え、表現し、感性を研ぎ澄ませることを目標に研究を進めている。

異年齢・異世代交流を通しての「子ども文化」の継承と創造

田甫 綾野

地域における子どもの異年齢集団がみられなくなり、地域の子ども文化が消滅したといわれて久しい。このような状況の中で、いかに「子ども文化」を継承し、創造していくのかということは大きな課題である。私たち大人がそれを意図的に構成していくような試みが求められているといえるだろう。幼稚園や保育所でもさまざまな取り組みがされていると思われるが、現在の私の研究の中でみえてきたことから、「子ども文化」について考えてみたい。

私は現在、家庭科教育において進められている中学生と幼児との「触れ合い体験」についての研究を手掛かりに、幼児の異年齢・異世代交流について研究している。たいていの場合、中学生がおもちゃを作ったり、遊びを考えたりして幼稚園や保育所に出向き、一緒に遊ぶということが行われている。しかしながら、ほとんどの中学生が「幼児をいかに遊ばせるか」ということしか考えておらず、「一緒に遊ぶ」姿がみられない。

具体的には、「的あて」や「魚釣り」などのゲームを中学生が作り、幼児にそれらで遊ばせ、景品をあげるというものである。たまに鬼遊びなどをしているグループもみられるのだが、中学生は速足程度でふらふらと逃げているだけなので、3歳児にもすぐにつかまってしまう。そのため、その時は楽しい時間を過ごすのだが、その後の幼児の遊びにはほとんど影響を与えず、「子ども文化」の継承には程遠い状況である。中学生自身が遊びの楽しさを理解していないということや、小さい子と一緒に遊ぶという経験がなく、どのように関わってよいか分からないということが浮き彫りとなった。

数年前のことであるが、中学生が「びゅんびゅんゴマ」を作ってもっていったことがあった。中学生自身もうまく回せなかったことから、自分たちもかなり練習し、おもしろくなったところでの交流会となった。5歳児も興味をもち、その後もかなり長く遊びが続き、足で回したり、音楽に合わせて回したりと発展し、最終的には生活発表会で披露することになったそうである。そして、この遊びは、4歳児、3歳児にも伝わっていった。中学生がおもしろがって遊ぶ姿をみて、幼児も「かっこいい」「やってみよう」と思うようになったのだろう。だからこそ、遊びが続いたのだろうと思われる。

このように、中学生がその遊びを楽しみ、その楽しさを幼児と共有し、幼児もそれを「かっこいい」「やってみよう」と思うことが「子ども文化」が継承されていく上では重要だと考える。これは、かつての異年齢集団での遊びと同じような状況だといえる。ただ「遊んでくれる人」ではなく、そこに憧れや厳しさが

存在するからこそ、「子ども文化」は伝承され、創造されてきたのだろう。これは幼稚園や保育所内での異年齢集団の中や、保護者や保育者と子どもとの中でも求められる姿なのではないだろうか。

ただ、異年齢・異世代の人が集えば文化が伝承するという事はない。「子ども文化」においても、ただ子どもたちが集うだけではなく、そこでどのような経験や活動が望ましいのか、私たちは分析し、それを実践していくことが必要であろう。このように、「子ども文化」が継承され、創造される機会を作っていくような異年齢・異世代交流について今後も考えていきたい。

●Profile

田南 綾野 (たんぼ あやの)
山梨大学大学院 准教授
保育者のライフストーリーから戦後の制度改革と保育実践との関係についての研究を行ってきた。現在は幼児の異年齢・異世代交流における「かかわり」について研究している。

保育の記録から考える 日本の保育文化

高橋 順子

私たち保育者は、保育実践を振り返り、どのように改善してきたかを保育日記、保育日誌、週日案などに記録を残している。これらの記録の中には、幼児と保育者が、日々、創り出した遊びや生活の様子が書かれていて、「保育文化」そのものであるといえるであろう。

日本保育学会第67回、第68回大会で、明治時代後期の保育の記録に関するポスター発表（共同研究者：柴崎正行・大妻女子大学）をした。この一部を取り上げ、保育の記録から考える継承したい日本の保育文化と未来への期待について述べていきたい。

まず、明治13年に創設された「大阪市立愛珠幼稚園」の保育日記（明治38年4月 第㉙ノ部）についてである。保育日記の表紙には年度と月の記載がある。日ごとの記録には、出欠席の記入に加え、具体的な遊びの様子が図入りで記入してある。例えば、明治38年4月6日 木曜日 快晴 画方、「随意なれば軍艦を主として汽車、戦争、×××大砲、画なり田中眞一の汽車は特に優なり」。明治38年4月4日から4月10日の一週間の記録には「随意」という表記が5回出てきている。優れた幼児の名前も書かれていることから、保姆の視点が個人へも向けられていることがうかがえる。また「随意」という表記から、幼児の姿を肯定的に受け止め、恩物中心の一斉指導から、一人ひとりの興味や発達を指導に活かすよう改善しつつあったといえる。

次に、明治34年4月、栃木県足利にある真言宗・鏝

阿寺に開設された「足利幼稚園」の保育日誌（明治36年度、39年度、40年度）についてである。この3年は、縦書きで共通の形式となっている。右側のページは、曜日と科目（談話・唱歌・遊嬉・手技の4項目）が記され、予定表になっている。左側のページには、保育後に保姆によって書かれた記録が記されている。右側のページの記載の例では、浦島太郎、桃太郎、舌切り雀などの講話の題材、「兎と亀」「かごめかごめ」などの具体的な遊び方が想像できる遊戯の内容、「椅子取り」など簡単なルールのある遊びなどが書かれている。左側のページには、明治36年度には、「目的」と柱だてがあり、保育目標の達成状況が書かれている。明治40年度には6月は雨でできないときもあるが、晴れると園外保育をしていた記録があり、園外の遊びを積極的にに行っていた。明治36年度より個人名と問題点を記載、明治39年度には「岩下キイがなかなか組に入れなかったが徐々に入ってくる」という内容から、幼児たちへの個別的な細かい配慮がなされるようになったことがうかがえる。

まとめとして、これらの記録は、100年以上も前のものであるが、目を通して一緒に保育について話し合えるようにも思える。現在の好きな遊びとともれる「随意」という時間の保障をし、幼児の姿を肯定的に受け止め幼児の主体性を重んずる姿勢、個々の興味や発達をとらえて配慮する指導、天候など状況に応じた保育内容の変更や工夫、具体的な遊び方が想像できる教材研究、そして保育の計画と振り返りを記録に残すことなど、現在の保育文化としても大切にされている保育者の志と営みは、この時代から継承され、今日まで保育現場で活かされ続けている。

平成27年4月1日より子ども・子育て支援新制度が開始され、戦後最も大きな制度改革といわれている。この制度改革後も、質の高い保育が叫ばれているが、その質の内容としてこうした先人の志と営みを継承していきたい。保育者の役割はますます広がり多忙になりつつあるが、写真など様々な映像記録機器などを活用し、わかりやすい簡潔な記録を家庭や地域へと伝達する方法をうまく工夫して、集団生活の中で個々の成長を温かく見守る保育実践を継承し、記録してきた日本の保育文化の伝統を未来へと守り、繋げていきたい。

●Profile

高橋 順子 (たかはし じゅんこ)
東京都豊島区立南長崎幼稚園 園長
保育実践を通して、園経営及び若手教員育成を行っている。
タイ王国チュラロンコン大学大学院に留学し、世界の幼児教育にも関心がある。

現役最古級園舎の幼稚園での保育

片山 知子

明治期にキリスト教女性宣教師が開設した幼稚園の一つで現在も当時建築された園舎を現役園舎として113年使い続ける園が長野県上田市にある。

学校法人梅花学園梅花幼稚園は当時の幼稚園教育に大きな期待を持ち、町に開設を願う人々と、キリスト教伝道を行おうとしていた宣教師たちの思いが重なり、1900年にカナダ人女性宣教師によって開設された。開設当初は茅葺の民家を借りて保育を開始した。2年後の1902年に土地を購入し、切妻瓦葺の大屋根を持つ平屋造り、外壁は下見板張りペンキ塗り（現在はモルタル塗に改修）の木造洋風園舎を建築した。

園舎は広いホールを中心に左右2部屋ずつの保育室を配置し、床は板貼りである。天井が高く、幅のある下り壁、大きなガラス窓、園庭へ出入りしやすい開口部など採光と風通しの良い工夫が見られる。当初からフレーベル主義の保育がなされており、更にフレーベルの精神でもあるキリスト教精神を大切にしたい宣教師たちの保育では、ホールにおいてサークル（会集）という子ども全員が一つの輪になって集まり、話を聞いたり歌やリズム、礼拝などの活動が行われた。

建物の基礎には宮大工の手法が用いられ、基礎石の上に柱を立てるといった耐震性にも優れた設計となっている。大屋根を支える構造には当時の最新建築技術である構造技法が用いられた。1901年には大阪で豪華な木造和風建築の愛珠幼稚園舎が建築されている。現役園舎として建築時期が1年の違いであるが、現在双方共が現役園舎としてあることは興味深い。

梅花幼稚園では当初はフレーベル主義であり恩物を扱うが、キリスト教精神を大切にしたいものであることを踏まえた保育が行われていた。園長である女性宣教師たちは当時の北米における幼児教育の最先端の情報を得ており、進歩主義の保育の工夫も取り入れられていく。当時の保育を記録した写真を見ると恩物で保育するだけではなく、リズム活動、園外保育、クリスマス行事、ヒルの積み木も導入され、子どもの経験を豊かなものとした工夫が見られる。1941年からの戦時下には宣教師たちの本国帰還政策により日本人園長への引き継ぎ、また上田市でも一部空襲被害など困難な時代を経験する。

しかし保育環境である園舎は継続して用いられ、今日に至った。戦後、新たに保育が再開し、その中で保育者たちは子ども一人ひとりを大切に考える保育として援助の在り方、環境の構成などを学び合い、遊びを大切に保育として40年以上の歴史を積み重ねてきた。

かつてヒルの積み木を導入した進取の気概は、その後の大型箱積み木へと繋がり、現在では150個の大型箱積み木を毎日使いこなす子どもたちの姿がある。

113年の歴史の園舎にあって、保育の内容には時代の変遷を見るが、子どもの生活を大事にし、リンゴやコマなど地域の農産物や、身近な園庭の果樹などを活用した活動を取り入れるなど、地域の人的、物的環境や文化と連携した保育協力も生み出してきた。

以上、地域の発展をめざし建築された園舎が、113年の間に地域の中で保育文化を作り出し、そこで生きる子どもと保育者を含めた人々により、今も継承されている事例として紹介させていただいた。

子どもを中心に据えた保育がこの歴史的な保育環境を通して今後も継続され、さらに発展することを期待したい。

●Profile

片山 知子（かたやま ともこ）

和泉短期大学 准教授

キリスト教保育の現場で保育実践に携わってきた。現在はキリスト教保育者養成にかかわっている。

「保育の中の遊び」「保育者」「キリスト教保育」にこだわり、教育と研究に向き合っている。

お し ら せ

第69回大会開催

- ・ 日 付：2016年 5月 7日(土) 9:30～
5月 8日(日) 9:30～
- ・ 会 場：東京学芸大学
- ・ 開催地区：関東地区ブロック
- ・ 大会テーマ：

乳幼児期の教育／保育の再構築
— 研究と実践と政策を越境する —

第69回大会ホームページ

<http://gakkai.co.jp/hoiku69>

* 大会予約参加の申込期限 *

発表はせずに大会へ参加のみされる方の事前申込み期限は1月20日(水) までとなっております。大会ホームページより申込みが出来ますので、奮ってご参加ください。